

滋賀県を代表する風景として、近江八景と琵琶湖八景があります。特に近江八景は、全国を代表する風景鑑賞の原型にもなっています。ともに風景は、琵琶湖と密接な関係を有しています。

1. 琵琶湖畔の風景

琵琶湖を中央に、四方を美しい山々が囲みます。降り積もった雨雪が山に染み込み湧水から河川となって平野を潤し、琵琶湖に注ぎます。麓の谷間や平地には連綿と繋がってきた人々の暮らしがあり、自然景観と重なって言葉にならない美しい景観を形成してきました。

その景観は、古代から多くの文人の心を動かし、様々なかたちで表現されてきました。

日本最古の歌集である『万葉集』には、116の歌に琵琶湖周辺の情景が詠まれ、平安時代の勅撰歌謡集『梁塵秘抄』、清少納言の『枕草子』、菅原孝標女による『更級日記』、阿仏尼の『十六夜日記』などの歌や歌謡、紀行文などに琵琶湖の風景が織り込まれてきました。

平面絵画としては、鎌倉時代中期の「四季絵屏風」に、打出浜、粟津、辛崎、瀬田橋、真野入江、堅田浦などが描かれ、「石山寺縁起絵巻」には、石山寺を中心として瀬田川の河川岸や橋が美しく表現されています。室町時代になると国重要文化財の屏風「近江名所図」が描かれ、比良山系、堅田浮御堂、唐崎の松、日吉大社、三井寺など湖西の名所が詳細に描かれ、臨場感を持って鑑賞できます。



図3-4-1
歌川広重 近江八景【魚栄版】のうち瀬田夕照
(大津市歴史博物館蔵)

2. 瀟湘八景と近江八景

そして、鎌倉時代に栄西や道元などの禅僧が中国に渡って禅宗文化を日本に伝えると、室町時代には中国の画僧が日本を訪れ、彼らと共にやってきた水墨画が注目されるようになりました。特に、中国湖南省の湘江と瀟水という川とそれが流れ込む洞庭湖に見られる八つの風景を描いた「瀟湘八景」が京、近江の文人墨客の目に止まりました。

江戸時代の初めに、公家で文化人であった近衛信尹が、膳所城からみた風景を「瀟湘八景」になぞらえ、「近江八景」として選定し、和歌を詠んだと言われています。



瀟湘八景で表現された「秋月」「夕照」「帰帆」…などの漢字2字の成語が、膳所城から見た琵琶湖畔の風景とこのように合致するものかと驚かされます。「近江八景」における風景と成語は、この組み合わせ以外に考えられません。宮中でも支持されて歌会の定番となり、松尾芭蕉も意識して俳諧に詠みこむほど庶民へも浸透しました。のちに歌川広重の優れた浮世絵が登場すると、全国の名所ランキングでも別格級となりました。

表3-4-1 瀟湘八景と近江八景の比較

瀟湘八景	近江八景
洞庭秋月	石山秋月
漁村夕照	瀬田夕照
遠浦帰帆	矢橋帰帆
山市晴嵐	粟津晴嵐
烟寺晚鐘	三井晚鐘
瀟湘夜雨	唐崎夜雨
平沙落雁	堅田落雁
江天暮雪	比良暮雪

3. 琵琶湖八景

昭和25(1950)年、琵琶湖全域と伊吹山、比良山地などを含む山々が日本初の国定公園(琵琶湖国定公園)に指定されました。「近江八景」が、南湖の一部に集中していることもあり、これを機に、県民への公募によって琵琶湖全体に広げた八景である「琵琶湖八景」が選定されました。

夕陽 瀬田・石山の清流
涼風 雄松崎の白汀
新雪 賤ヶ岳の大観
春色 安土・八幡の水郷

煙雨 比叡の樹林
曉霧 海津大崎の岩礁
月明 彦根の古城
深緑 竹生島の沈影

いずれも、琵琶湖と山々が奏でる唯一無二の風景を表現した言葉と共に優れた名所として位置付けられました。現代に至っては、このように美しい自然の風景にとどまらず、その場所に暮らす人々の生業や民俗文化の香り漂う、「文化的景観」という選定のかたちも現れてきています。古来、水を大切に暮らしてきた滋賀県民であるからこそ、琵琶湖と山々を背景に人々の姿が染み込んでいます。湖と山の国に暮らす幸せがここにあるのです。



写真3-4-1 竹生島(執筆者撮影)

成安造形大学附属近江学研究所 加藤 賢治